

平次女難

野村胡堂

—

「八、良い月だなア」

「何かやりましようか、親分」

「止してくれ、てめえ手前がしおからこえ塩辛声を張り上げると、お月様が驚いて顔を隠す」

「おやッ、変な女がいますぜ」

銭形の平次が、自分のガラツ八を伴れて兩國橋にかかったのはよつ亥刻（十時）

過ぎ。薄寒いので、九月十三夜の月が中天に懸ると、橋の上にいた月見の客も

大方帰って、浜町河岸までは目をかみんぎ遮る物もなく、唯もうコバルト色の灰を撒い

たような美しい夜です。



野暮用で本所からの帰り、橋の中程まで来ると、ガラッ八がこう言つて平次の袖を引きました。たいした知恵のある男ではありませんが、眼と耳の良いことはガラッ八の天稟てんびんで、平次のためには、これ程詭向あつらえきのワキ役はなかつたのでした。

「あの女か」

「ありや身投げですぜ、親分」

「人待ち顔じゃないか、逢引あいびきかも知れないよ」

「逢引らんかんが欄干らんかんへ這い上がりやしません、あッ」

橋の上にシヨンボリ立っていた女、平次とガラッ八に見とがめられたと気が付くと、いきなり欄干を越して、冷たそうな水へザンブと飛込んでしまったのです。

「八、飛込めッ」

「いけねえ、親分、自慢じゃねえが、あつしは徳利だ」

「馬鹿野郎、着物の番でもするがいい」

そういううちにパラリと着物を脱ぎ捨てた平次、何の躊躇もなく、パツと冷たそうな川へ飛込んでしまいました。

女は一度沈んで浮かんだところを、橋の下にやって来た月見船が漕ぎ寄せ、何をあわてたか權を振上げましたが、気が付いたと見えて、水の中の平次と力を併せ、身投女を、舷ふなべりに引揚げました。

女は激動のために正体ありませんが、幸いたいして水は呑んでいない様子、月見船の客は船頭と力を併せて、濡れた着物を脱がせて、船頭の半纏はんでんや、客の羽織などを着せて、擦さすったり叩いたり、いろいろ介抱に手を尽していると、どうやらこうやら元氣を持ち直します。

蒼い月の光に照されたところを見ると、年の頃は二十二三、少しふけてはお

りますが、素晴らしい容色きりようです。

「どうだい、気分は。少しは落着いたか、何だってそんな無分別な事をするんだ」

平次は素っ裸のまま、女を介抱しております。近間せまにいる月見船が二三隻、この騒ぎに寄って来ましたが、無事に救い上げられた様子を見ると、この頃の町人は『事勿れ主義』てつていに徹底して、別段口をきく者ありません。

「有難う御座います」

顔を挙げた女、平次はそれを正面から眺めて、どうやら見覚えがあるような気がしてなりません。

「違あやまったら謝るが、お前さんは、お楽といやしないか」

「えッ？」

女はもう一度心を取直して、橋間きょうかんの月に平次の顔をすかしました。

「ね、やっぱりお楽だろ？」

「あッ、銭形の親分、面目めんぼくない」

女は毛氈もうせんの上へ身を投げかけるように、消えも入りたい風情です。男の羽織と半纏を引掛けた浅ましい姿がたまらなく恥かしかつたのでしよう。

「銭形の親分さんで、——これは良い方にお目にかかりました。私は長谷川町で小さな質屋をしているささや笹屋の源助という者で御座います。身分不相応ぜいな贅ぜいで、生意気にお月様などを眺めながら、十七文字を揃そろえていると、いきなり鼻の先へ人間が降る騒さわぎでしょう、全く、こんなに驚いたことはありません」

成程、俳諧はいかいの一つ位は捻ひねりそうな、質屋の亭主にしては、肌合いきの粹いきな男。銭形の平次と聞いて、いくらか冷静さを取戻したものが、身投女の後ろから、こんな事を言っております。長谷川町の笹屋というところではありません。新しいながら相当繁昌する店で、商売柄平次も満更知らないとありません。

「お蔭で人一人助けました、飛んだ功德くどくでしたよ」

と平次。

「功德には違いありませんが、町人はこんな時は何の役にも立ちません」

「ところで、お樂、お前のような女が、なんだって又身を投げる気になったんだ」

平次は質屋の亭主にはかまわず、船を両国の方へ漕こがせながら、漸く心持が落着いたららしいお樂に話しかけました。

「何も洒落しゃれや道楽に死ぬ気になったんじゃないやありません、親分、お怨うらみ申しますよ」

「何？」

「兄の香三郎が、親分の縄に掛って、伝馬町に送られてから、世間の人は私を相手にしてくれませんか」

「兄は泥棒かも知れませんが、妹の私は何にも知りやしません。それを町内の構者かまいものにして、厄病神やくびょうがみのように追払ったのは、何という訳の解らない人達でしょう」

「大泥棒の妹と知れると、どこでも三日と置いてはくれません。三月の間に五軒も越して歩いて少しばかりの貯えたくわも費い果し、身でも投げなきやア、乞食をするより外に身の振り方の工夫もつかなかったのです。親分やお上を怨うらんじや悪いでしょうか」

平次も驚きました。その頃江戸中を騒がせた三人組の大泥棒のうち、一人は逃げ、一人は死に、香三郎というのだけ捕ったのを、今年中の大手柄おてしにしていると、何時の間やら、こんな飛んでもないところに罪を作っていたのでした。

「そいつは気の毒だ。岡っ引だつて鬼や蛇じやじゃねえ、早くそういつて来さえすれば、何とかお前一人の身の振方位ふりかた考えてやったのに——」

「親分、そういつて下さると嬉しいけれど、私はどうせ大泥棒の妹だから」

「そうひがひがんじゃいけねえ、お前の身の立つように、及ばずながら何とか工夫をしてやろう。もう死ぬなんて、つまらねえ心持は起しぢやならねえよ」

「——」

お楽は泣いておりました。

「親分、土左衛門はどうしました」

軽舸はしけで摺れ違つたのは八五郎でした。河へ飛込んだ親分の身を案じて、西両国の橋番所に駈け付けると、船を出して貰つて現場——橋の下——へ漕がせたのです。

「八か、何て口をきくんだ」

「それじゃお土左」

「馬鹿ッ」

こんな他愛たあいのない掛合いが、船の中の空気をすつかり柔やわらげてくれました。

「親分、寒かったでしょうね、——その女は橋番所に引渡して大急ぎで帰りましょう。姐御は一本付けて待ってますぜ」

「この人を伴れて帰るんだ、駕籠をそういつてくれ」

「へエ——、お土左を？ 物好きだねえ」

「つまらねえ事をいうな、——笹屋の旦那、それじゃこの女はあつしが引取つて参ります。とんだお世話になりました」

平次がお楽を伴れ込んだのを見ると、女房のお静は悪い顔をするどころか、自分の親身の姉が、久し振りで里に帰ったように、何の隔へだてもなく受け容れてくれました。

まだ厄やくを越したばかり、若くて美しくて、氣立てのいいお静は、氣の毒なほど下手したでに出て、綺麗で年上で、何となく押の強いお楽を立ててやったのです。

翌る日。

「この辺へ商売用で来ました、序ついでと言っちゃ済みませんが、昨夜は親分の御世話になりましたのでお礼かたがた伺いました——」

そんな事を言つて、笹屋の主人源助が手土産を持って顔を出しました。

「とんでもない、あつしこそお礼に上がらなきやアならないところで」

平次はあいそよく迎えて、何くれとなく話しました。平次よりは幾つか年上でしようが、世故せこにも長けた、文筆にも明るい様子で、この頃の質屋の亭主には、

全く珍らしい人柄でした。

馬が合うというものか、二人はすっかり話し込んで、お静の着替を借りて着たお楽を相手に、到頭日の暮れるまで長話をしてしまったものです。

それから源助はチョコチョコ訪ねて来ました。平次が留守だと、お楽やお静や、ガラツ八を相手に冗談口をきいて帰ることもあります。

「ありや何だい、質屋の亭主だつていうが、野幫間のだいこだか、俳諧師はいかいしだか解つたものじゃない。あんな物識ものしりがお顔をする野郎は俺は嫌いさ」

ガラツ八は、蔭へ廻るとこんな事をいいますが、面と向うと、まことにだらしなく引込んでしまいます。物識と通人は、ガラツ八にとっては一番の苦手だったのです。

もう一人、お楽と源助を嫌いな人間がありました。

それは、ツイ二軒置いて隣に住んでいる、駄菓子屋の娘お町。お静と一緒に

水茶屋に出ている、平次に気があつたのですが、張合つて綺麗に敗^まけて、今でも両国の水茶屋に通つて、女だてらに大酒を飲んで、男から男へと渡つて歩くようなだらしない生活を続けているのでした。

「八さん、お寄りよ。知らん顔をして通ると、この間、私を口説^{くど}いたことを町内へ触れて歩くよ」

「あッ、お町か、敵^{かな}わねえな？」

ガラツ八はそう言いながらも、悪い心持がしないらしく、縁台に腰をおろして、お町がくんでくれた温^{ぬる}い茶を啜^{すす}ります。

「ね、八さん、あの女はどここの化物さ。平次親分のところへ入り込んで、近頃はお静さんを使い廻しているツてえじゃないか」

「俺が、そんな事を知るものか。いずれ田舎の従妹^{いとこ}とか姪^{めい}とかいうんだらう」
ガラツ八は当らず触^{さわ}らずの事を言っております。

「近所にあんなのがいちゃ癩しやくにさわるねえ。お静さんもお静さんじゃないか、何だつて又黙つて眺めているんだらう」

「そこがお静さんのいいところさ、お前とは少しばかり出来合が違う」

「何だとえ、もう一度いつて御覧」

「何遍なんべんでもいうよ、お静さんのあのポーツとしたところを親分が気に入つたんだ。そういつちや済まねえが、お町のようにピンシャンしてちや、親分の気に入るわけはねえ」

「畜生ッ、何とでも言うがいい。——ところで、あのお楽とかいう女は、どうだい」

お町はこう言われてもたいして腹を立てる様子もなく、お楽のことを根ほり葉ほり聞きたがつております。

「あのお楽ときた日には大変さ。唯もうネットリして、膠にかわでねって、鳥糞とりもちでこ

ねて、味噌で味を付けたようだよ」

「嫌だねえ、万一小静さんから親分を横奪りするような事があつたら、このお町さんが生かしちや置かないって、そう言っておくれ」

「少し物騒だね」

「何が物騒さ、あんな女に町内を荒らされる方がよつ程物騒じゃないか」

お町はそういった女でした。お静と平次が一緒になると、ゲームに負けたよ
うな心持で、一旦綺麗に引下がっては見たものの、横合から変なのが飛出して、
平次へちよつかいを出しているのを見ると、自分がいさぎよく引下がっただけ
に、打ち殺してもしまいたいような、言いようのない衝動を感じる——といっ
た性たちの女だったのです。

四五日は無事に過ぎました。

お静は相変らずまめに立働いて、何の蔭もないように暮しておりますが、氣を付けて見ると、ほんやり呆然して溜息を吐くといつたような様子が、ちよいちよい平次にも見られるようになって来ました。

お楽はガラツ八がいったように、少しねっとりしておりますが、奉公人のように、よく働いております。めかけ妾、旅芸人といった過去はあるにしても、平次やお静の親切な仕向に折れたのでしょう。見たところ、綺麗で、さいばし才走つて、身だしなみがよくて、知らないものが見たら、こちらが平次の女房で、お静を妹とも思ふことでしょう。

「ね、お前さん、ちよいと」

或る日、お楽の留守を見定めて、お静は物蔭に平次を呼び入れました。

「何だえ、誰も聞いちゃいない、用事があるならそこで話せ」

平次は少し面倒臭そうでした。

「私、こんな事はいうまいと思っただけけれど、気味が悪くて、どうにも我慢がならない。お願いだから、お金か何かやってお楽さんを外へ預けて下さいませんか？」

「何？」

予想外なお静の言葉に、平次は眼を睜みはりました。

「——出て貰ったって、その日に困らせるような事さえしなければ、義理は済むじゃありませんか、お願いですから」

「お前妬やいてるのか」

「あれ、そんな事じゃありません。近頃私はこの儘ジツとしていると、殺されそうな気がしてならないんです」

「——」

「昨夜裏ゆうべの井戸で水を汲くんでいると、いきなり私の足をさらつたものがあるじゃありませんか。井桁いげたにつかまって、井戸へ落ちるのだけは助かりましたが、気が付いて見ると、水を汲む時立つ場所へ、縄で罫わなを仕掛けて置いて、梁はりを通して、縄の端を向うから引くようにしてあつたんです。誰が引いたか解らないといえはそれまでですが、この辺に私を殺す氣の人がいるには間違いありません」

「――」

「それから、今朝は物置に入っていると、外から戸を締めて、輪鍵わかぎをかけて心張はりをした上、炭俵へ火を点つけた者があります。幸い気が付いて戸を押倒して飛出し、炭俵の火が軒へ移りかけたのを、天水桶から水を汲み出して消しました。が、この様子だと、これからもどんな事をされるか解りません。お町さんに聞くと、二三日前にもお楽さんは、わざわざ兩國の薬屋まで行って、何か買って

いるから、そつと後から跟ついて行つて見ると、石見銀山の鼠取り葉いわみぎんざんだったそうです、——どこでいつ使うか解らないから用心するがいい、狙ねらわれているのは鼠じゃなからう——お町さんはそういつてくれました」

「——」
お静の言うのはもつともでした。二度も三度も、明あきらかに自分の命を狙ねらう者の細工を見せられては、どんな義理があるにしても、この上素姓の怪しいお楽を、同じ屋根の下には置きたくなかったです。気の弱い、物優しいお静が、思い切つてこう言うのですから、それは本当によくよくの思いだったでしょう。

「お静」

「ハイ」

「お前は、俺がお上から十手捕縄を預かる身分と知つて嫁に來た筈だな」

平次の言葉は以ての外でした。嫁入ってから半歳あまり、ツイ荒い言葉も聞いたことのないお静は、あまりの事に仰天して、平次の憤怒ふんぬとも、疑惑ともつかぬ顔を見上げました。お静は息の詰まるような心持だったのです。

「縛られたり、打たれたり、顔へ怪我をしてさえ、一言も泣き言をいわなかったお前が、それ位のことです、お樂を追い出せとは何ということだ。やはり嫉妬やきもちと言われても文句はあるまい——いや、言訳は聞かない。身まで投げる気になつたお樂を助けて、それが気に入らないというような女房は、俺の方でも考え直さなきゃアなるまい。お上の御用を勤めている身体には、いっどんな用事があるかも知れないのに、一々嫉妬がましい事を言われちゃ、御用が勤まらないというものだ」

「あれ、そんな積りじゃ」

「黙ってお袋ふくろのところへ帰ってくれ。長いことは言わない、十日経たないうち

に、何とか言つてやろう。兎に角お前がここにいちや、ろくな事がなさそうだ。手廻りの荷物だけ纏めて、後と言わずに、今直ぐ行つてくれ。三行半をやるか、迎えの人をやるか、それはもう少し考えてからの事だ——無分別なことをするな」

「お前さん、そんな、そんな、——私はそんな積りで言つたんじゃありません。堪忍して下さい、死んでも私はここを動きません」

お静はあまりの事に顛倒して、平次の膝に縋り付くと、赤ん坊のようにイヤをしながら泣きました。もう二十歳にもなつて、大丸髻の赤い手柄がおかしい位なお静が、平常可愛がられ過ぎて来たにしても、これは又あまりに他愛がありません。

「お静、見つともない、いい出した事を変替する俺じゃない。兎も角お袋の所へ行つて、五日なり十日なり、俺の考えの決まるのを待つがいい」

「否、否、私は否、どんなことがあつても、ここを動きやしません。ね、私が悪かったら堪忍して下さい」

「馬鹿ッ」

「堪忍して下さい、お願い」

お静は平次の膝ひざから胸へ、首にすがりついて、たった三つになる子供のよう
に泣くのでした。

少し下脹しもぶくれの可愛らしい顔が涙に濡ぬれて、紅い唇のワナワナと顫ふるういじらし
さは、どんな剛情な平次も、折れるだろうと思われましたが、頑固がんこに眼を閉じ
た平次は、それをむしり取るようにもぎ離して、

「八、ガラッ八はいないか」

縁側の方へ声を掛けるのでした。

「オーイ」

ノソリと立ったガラツ八も、拳固げんこで切りしきりと涙を拭いております。

「気の毒だがお静をお袋のところへ連れて行ってくれ。十日経ったら、改めて平次が伺いますって、いいか」

「御免蒙ごめんこうむろう」

「何だと？」

「そんな使は御免蒙ろうよ」

「馬鹿ッ、突っ立って物を言う奴があるか」

「立とうと坐ろうと勝手だ。こんな貞女ていじょを追い出して、あの雌猫めねこの化けたような女と一緒になる積りだろう。そんな野郎はもう親分でも子分でもねえ」

「野郎と言ったな。馬鹿ッ」

「馬鹿の親分は野郎で沢山だ」

「畜生ッ、言やがったな」

平次は思わず煙草盆を持って立上りました。

「あれッ、八さん、お前さんの方が引込んでいてくれなきゃア、——どうせ私が悪いんだから」

お静は二人の間に割って入りました。

四

「親分、可哀相じゃありませんか、お静さんは泣きながら行きましたよ。私は丁度横町で、バッタリ出会わすと、お静さんをなだ勧め勧め行った八さんが、往來で私を捕まえて、そりや変な事ばかり言うんですもの、間の悪さといったら」

お静はそう言って銚子を取上げました。お静が出かけた後、邪魔する者もない心持で、ばんしゃく晩酌の相手までしていたのです。

「お前が来てから、お静の調子がすっかり変ったのさ。気の毒だが、御用聞の平次に、妬く女房があつちやお上の御用が勤まらねえ」

「でもねえ、あんなに騒がれて一緒になつた二人じゃありませんか。私なんか、遠くから見ていてどんなに羨ましかつたことか」

お楽はそう言つて、丸い顎を襟に埋めました。銚子を持った華奢な手が少し顫えて、海千山千といった妖婦肌の女にしては、変に亢ぶる感情を押えきれない様子です。

「お前も一つやるかい、お楽」

雫の滴れそうな猪口を、お楽は小さく両手で受けてニツコリしました。妙に脂の乗った艶かしさは、嫌な言葉ですが『ニンマリ笑つた』と言うのが一番適当しているでしょう。

お静の着換には相違ありませんが、お楽が着ると、銘仙も木綿も粹になるの

でした。洗い髪に、赤い赤い唇、猪口にさわ触るとそのまま酒も紅になりそうな、それは何という官能的な魅惑みわくでしょう。

「だけど嬉しいねえ、親分とこうしていられるんだから、私はまるで夢のような心持よ」

少しなれなれ馴々しい口をきいて、猪口を返す手に思わせぶりな力をこめたりしました。

「つまらない事を言っちゃいけない。ところで、お前にいろいろ聞きたいことがあるが、——言ってくれるだろうか」

と平次。

「親分には命を助けて貰った上、こんなに親切にして頂くんだから何もかも言ってしまうますわ、その代り私の願いも聞いて下さるでしょう？」

お楽は何時の間にやら長火鉢ながひぼちの向う側から、こちら側へ滑すべって、平次の身体

にもたれるようにしているのです。

「それはもう、大抵たいていの事なら聞くが——」

「有難いわねえ、親分、一体、どんなことをお話すればいいの」

「ほかでもない、半歳前に江戸中を荒した三人組の大泥棒、一人はお前の兄の香三郎で、これは伝馬町の大牢たいろうに入っている。もう一人は蝮まむしの三平——これは死んだそうだが、——あと一人残った人殺しの房吉、これは頭分で、人の五六人も殺している。一人だけ縄目を脱のがれて、今でも人もなげに御府内を荒し廻り、この平次を白痴こけにして喜んでいる。俺はこの房吉を縛むすって、江戸中の人を安心させたいのだよ」

「解りましたワ、親分、思い切って言ってしましましょう。房吉は名を変えて、今では江戸の真中まんなかに住んで、親分が死んだと思ひ込んでいる三平と一緒に、相変わらず悪事を重ねていますよ」

お楽の手は何時の間にもやら平次の腕に巻き付いて、その少しほてった顔は、妙に悩ましく平次の緊張した顔を見上げるのでした。

「それは有難い。房吉、あの人殺しの房吉といわれた野郎と、兄弟分の三平はどこにいる、教えてくれ、お楽」

「その代り私のお願い、——」

「出来ることなら何でも聞く、——房吉はどこだ」

「——」

お楽が何か言おうとした時でした。

「御免下さい」

お勝手の格子が開いて、ソロリと入って来たのは、石原の利助の娘で、平次には日頃恩にもなり、親したしみも持っているお品。親の利助の病中は、その代りに子分共を指図して、十手捕縄を恥はずかしめなかつた女ですから、見たところは弱々

しい、出戻りとも思えぬ若くて美しいお品ですが、きしょう氣象や才知は、並の男の三人分もあるうという女です。ちようどこの時、

「親分、今晚は、ちよいとお静さんのお留守見舞よ、入っていい？」

表からは二軒置いて隣に住む、昔のお静のほうばい朋輩お町、それは、無抵抗で優しいお静にだけは兜かぶとを脱ぬいでおりますが、外の女が平次に指でも差そうとしたら、やまいぬ狂犬のように喰い付いてやろうという恐ろしい女です。

「あッ、お品さん、——お町もかい」

平次もあつけ呆氣にとられました。折角お楽の口から兇賊のありか住所を聞出そうとしてゐる矢先に、こんなのに飛込まれては、全くやり切れません。

「お町もか——はひどいでしよう。親分、そのもかかが氣に入らないよ」

お町は自分の家のように入って来ました。

「弱ったなア」

「弱つたのはお静さんよ。あんな可愛らしいお神さんは江戸中探したつて二人とあるものか、お前さんには過ぎものだ。そんな雌猫めねこの化けたような脂あぶらぎつた女なんかと見換みかえちや罰ばちが当るよ」

「お町、口が過ぎるぞ」

「お神酒みきは過ぎてるが、口なんか過ぎるものか」

お町は一寸も引きそうにありません、——それどころか、長火鉢の向うへ、女だてらに大胡坐おおあぐらをかくと、お楽の手から猪口ちよくをむしり取ります。

「さア、親分注いでおくれ。何をキョトキョトしているのさ、これでもこの雌猫よりはまじだよ。お静さんに親分を取られた時は器用にあきらめたが、親分をほかの女に取られるような事があっちゃ、両国の水茶屋の名折れだよ」

平次は苦笑いして立上がりました。後ろにはお品、

「親分、お静さんはお里へ帰ったそうですねえ」

「どこから聞いたんだ、お品さん」

「手紙が来ましたよ、頼むから一と晩親分を見張って下さい——って」

「どれ、その手紙を見せな」

平次はお品の手から手紙を受取りましたが、見覚えのある手蹟しゅせきではありませ
ん。

「親分、ここへ泊っても構わないでしょう？」

お品までがこんな事を言います。これはお町と違って、叱ることも追払うこ
とも出来ないだけが、厄介というものでしょう。

「こいつは面白いや。女三人で親分を真中に、睨めっこのお通夜つやなんざ洒落た
ものだね」

お町はすっかり喜んでおります。

「親分、あの話は明日にしましょう」

と、お楽。これも辟易へきえきする柄ではありませんが、さすがにこうなつては、何を切り出すことも出来ません。

「驚いたな、どうも、みんな帰ってくれ。御親切は有難いが、一と晩頑張つていられちゃ、俺がたまらない」

と、平次。

「色男には誰になるってね、親分、こう新造に騒がれるのも満更悪い心持じゃないだろう」

お町は柱にもたれて太平楽を言っております。

五

銭形の平次もこの晩ほどひどい目に逢わされた事はありません。脂ぎった妖

艶なお楽と、鉄火で阿婆摺あばずれで男のように啖呵たんかを切るお町と、出戻りとはいっても、美しくて賢いお品の間に挟かまって、一と晩ばんさいなまれたのです。

朝になると、飛出して一と風呂、お品が拵こしらえてくれた飯を済ますと、そのま
まプイと飛出してしまいました。これよりほかには、女難除けの手段てだても考えら
れなかったのです。留守は多分、お品がいいようにやってくれるでしょう。し
かし、事件は、その日のうちに急転直下して、凄まじい終局まで推し進んでし
まいました。

その晩、町内の銭湯へ行ったお楽が、容易に帰らないと思っていると、

「あ、人、人殺しッ」

路地の中で大変な騒はぎが始まりました。

留守番のお品は飛んで出ました。お町が引揚げてしまった後、さすがにお品
一人では淋しかったのです。

「何だ何だ」

あっちこっちから人が飛出して来ました。平次の家の近く、通りから少し入った一間の路地、一方は板塀で、一方は表を閉じた貸家、その先が生垣で、共同井戸で、袋路地になっておりますから、日が暮れると滅多に人の通らないところですよ。

誰か手燭てしよくを持出すと、

「あッ」

皆な潮の引いたように退きました。恐ろしい血潮の中に、若い女が仰向けに倒れているのです。

「平次親分のところにいる人じゃないか」

誰かが言います。

紛れまぎもなくそれは、お樂の取乱した湯上がり姿に相違なかったのです。

平次は朝から留守、どうする事も出来ません。そのうちに誰が言ってやったか、町役人が見廻り同心を連れてやって来ました。

うしろから顔を出したのは、どうして嗅ぎ付けたか、三輪の万七とお神楽の清吉。お品は『しまった』と思いましたが、今更病中の父親を連れて来るわけにも行かず、一人で気を揉んでおります。

「旦那、申し上げます。殺されたのは、この間から平次のところへ入り込んでいる女で、お楽とか言うそうです。そのために平次は女房のお静を出したって話ですから、いずれ、そんな事で刃物三昧はものまいになったんじゃ御座いませんか」

万七はすっかり好い心持そうに、お楽の死体を見たり、そこいら中の人に当たり、目まぐるしく活動しては、合間合間に同心に報告しております。

「刃物は何だ」

「あいくち匕首の細いので御座います、うしろから突いたところをみると、下手人はど

うせ女でしよう」

「フォーム」

「妙な物を見付けましたよ、旦那、死体の側の血の中にこれが落ちていました」
万七の渡したのを見ると、斑ふぶの入った鼈甲べっこうの櫛くし。銀で唐草からくさを散らした、その頃にしては、この上もなく贅沢な品です。

「これはいい手掛りだ」と同心。

「心当りの者を聞くと、それほどの品ですから間違いはありません、平次の女房のお静の品なんだそうで——」

「何？ 平次の女房が下手人だというのか」

万七の謎を解いて、同心も驚いた様子です。

「お静が下手人だとは申しませんが、兎に角、この女のために昨夜追出されて、

お袋のところへ帰ったそうですから、一応呼出してお訊き下さいまし。こんな人通りのない路地の奥へ入って、どうして櫛くしなんか死体のそばへ置いたか、その弁解いいわけさえ立てば、お静の疑いはすぐ晴れます」

「フーム」

どうも万七の言う事は一々皮肉です。

「もう一つこれはたいした事じゃ御座いませんですが、念のために申上げておきます。お静は余程口惜くやしかつたと見えて、今日は朝一度、昼頃一度、平次の家うちの廻りまで来てウロウロしていたそうです。朝と昼来た位ですから、宵よいに来ないつてわけは御座いません」

「――」

いよいよ以て万七の舌は毒を含みます。

しかし、同心もすぐに平次の女房に縄を打たせるわけには行きませぬ。念に

は念を入れて、路地の内外、湯屋での様子、それから平次の家に留守番をしているお品まで調べました。が、お静を呼出して訊くより外には、下手人の見込みも当りも付きそうもないと解わかつたのです。

「お静の里というのはこの附近か」

と同心。

「ツイそこで」

「喚よんで来て貰おうか」

同心の許しが出ると、清吉は飛出そうとしました。

六

「どっこい、それには及ばねえよ、お静さんにやましい事があるわけはねえ」

ヌツと顔を出したのは八五郎でした。

「八兄あにい哥か、錢形の親分も飛んだ掛かかり合いで気の毒だな」

万七は妙に笑いたいような、泣き出したいようなしかめっ面を見せます。――

「ヘツヘツ、有難いことで、三輪の親分が大層気の毒がついていなすつたと、親分へ申しておきましようよ」

「ところでお静ちゃんはどうなすつたえ」

「これもお気の毒みたいな話で、ツイ今しがたまで、おつ母アとあつしを相手に、泣いたり笑ったりしていましたよ」

「本当かい」

「お隣で聞けば解りまさア」

「この櫛くしはお静さんのだってね」

万七は動かぬ証拠の積りで、鼈甲べっこうの櫛を見せました。

「お静さんのだったら、どうなるんだ」

「気の毒だが下手人の疑いは免れまぬがっこはねえ」

「へーエ」

「死体のそば、それも血の海の中に落ちていたんだ」

「そうですかい、もう一つ同じ櫛を持っている人があったらどうします、三輪の親分」

「何だと？」

「ちょっと待っておくんなさい」

ガラツ八は飛んで行きましたが、暫くすると、ベロンベロンに酔払ったお町を引つ担ぐようにして伴れて来ました。

「何だって？ あの雌猫めねこが殺された？ いい気味だね、明日まで生きていりゃ

ア、私が殺す積りだったよ。あん畜生と一と晩い嘘み合ったので、今日は気色が悪くて仕様がなから、店を休んで朝から呑んでいたんだよ」

いやもう滅茶滅茶の機嫌です。

「お町、人一人の命にかかわることだ、しつかりしておくれ。これだ、この櫛はお前のだろう」

ガラツ八は一生懸命でした。万七の手から受取った櫛をお町の朦朧もうろうたる酔眼の前へ持って行きます。

「私のだよ、誰が盗んで行きやがったんだ」

「確かにお前のだね」

「お静さんと一年前つにつ対に拵えたんだよ。お静さんのでなきやア私のさ」

「目印はないかえ」

「そんな物があるものか、針で突いた程の傷も付けないのが自慢だったんだ。」

誰が一体盗んで行ったんだ」

お町の言うのは嘘らしくもありません。

「いつ盗まれたんだ、でたらめ出鱈目を言っちゃならねえよ」

万七は横合から口を出しました。

「出鱈目、チ、畜生、岡っ引じゃあるまいし、お町姐さんが出鱈目を言うかい。

櫛は二月前に盗まれたんだ。町奉行所へ届出なかったのが悪きやア、どうともしやがれ」

お町の大地に崩折れるのを尻目しりめに、

「八兄哥、お静さんの疑いは晴れたとは言えねえな」

万七はニヤリとします。

「三輪の親分、お静さんは昼からズーツとここへ来るまであつしと話していたんですぜ」

八五郎は少しムツとした様子です。

「一つ穴だ、あて当になるものか」

「三輪の、あつしが嘘をついたって言うのかえ」

「誰もそんな事は言わねえよ」

「お町はこの間からお楽の阿魔あまを殺すんだって威張っていたが、もう少し訊いてみちやどうです、え、親分」

「こんな酔っ払いに人間一人殺せるわけはねえ。無駄だよ、八兄哥——」
「じゃどうあつても」

「縄張外で気の毒だが、平次兄哥ではこの調べがむずかしからう。俺が代つてお静さんの口を割つてやらなきやアなるまい、どっこい」

三輪の万七はそう言つて、お神楽かぐらの清吉を振向きました。何やら目くばせすると、苦い笑いが二人の頬をニヤリと走ります。

「畜生ッ、そんな事をされちゃ銭形の親分の名折れだ、お静さんを調べるなんて、俺が不承知だ」

八五郎は大手を拡ひろげて立塞ひらがりました。

「馬鹿野郎、奉たてまつっておきやアいい気になって、手前達てめえたち三下の知ったこつちやねえ、黙もくって引込んでいやがれ」

「何を言やがる、手前てめえは仲間の誼よしみてえ事を知らねえのか、義理も人情もねえ野郎だ。それもお静さんに少しでも疑いがあるなら兎も角、お静さんは、お袋と俺の側を一寸も離れちゃいねえんだぞ」

「うるさいッ」

「金輪際こんりんさいここを通すものか」

「役目の表でもか」

「馬鹿野郎、ドジを通らねえと、手前のようになるとよ、ハッハッハッ」
清吉はこんな洒落しゃれを言いながら、八五郎の胸をドンと突きました。

「野郎、突きやアがったな」

飛びかかろうとする八五郎。

「騒ぐな、八五郎、話は俺がつけてやる」

うしろからそつと肩に手を置いた者があります。

「何をッ」

振り返ると、八丁堀の旦那、吟味与力筆頭笹野新三郎が、微笑ふくを含んで立っているのです。

七

万七とガラツ八の争いの嵩こつずるのを惧おそれて、お品がそつと人を走らせ、笹野新三郎に助けを求めたのでした。

調べは又最初からやり直し、何から何まで念入りに繰返しましたが、結局、お楽を殺す動機を持っている者は、お静とお町の二人だけ。落ちていた櫛くしは、二人のうち、どっちかの物と決っておりますが、お町は二月前に紛失、お静は昨日落したというだけで、これも水掛論に終りそうです。

お静は到頭喚出されて、お町と一緒に調べられることになりました。騒ぎを聞いて丁度そこへやって来たお静は、その儘下手人の疑いを受けて、皆から冷たい眼で見られなければならなかつたのでした。

丁度そこへ、ノツソリと銭形平次が帰って来ました。

「あッ、親分、大変な事になった」

八五郎は飛付きました。万七のそばに引据ひきすえられたお静は、飛付くこともな

らず涙一杯溜めて、平次の喜び勇む顔を見ております。

「聞いたよ、お楽が殺されて、お静とお町が下手人の疑いを受けているって話だろう、——お蔭で俺には、何もかも解ったような気がする。旦那、御免なさいまし、三輪の親分、御苦勞様」

平次はそう言うと、ツカツカと死体のそばに寄り、提灯や手燭の明りで、恐ろしく念入りに調べ始めました。傷口から衣紋えもんから、その辺の大地まで、平次の眼からは、何一つ逃れようがありません。

「大方見当がつきましたよ、櫛くしを見せて下さい、ホウ、これはお静のだ」
「えッ」

ガラッ八はいう迄もなく、お静も、新三郎も、万七までもびっくりしました。自分の女房を致命的な疑いに引入れるような言葉です。

「どの辺に落ちていたんだ、誰が拾った？ もとのように置いて貰おうか、——」

—それで間違いはないね、後で間違つたなんて言われると困るが、何？ 目印が付けてあつた？ それは有難い」

平次はそう言つてもう一度櫛を取上げながら続けました。

「この櫛には血が着いていない、誰も拭きやしませんね、——もつとも一度血の着いた櫛なら、拭いても齒の間に血が残っている筈だが、この櫛にはそんな跡あとはない、——血の中に入つていて、血が着かないとすると、この櫛はお樂を殺した時落したのではなくて、後から持つて来て、そつと置いて行つたものに違くない。血が乾きかけてから置いたなら、櫛へは血が着かなかつたわけで——」

「——」
皆はこの一言ですつかり平次に征服されてしまいました。互いに顔を見合せて、次の言葉を待つばかりです。

「自分の持物を死体のそばへ持って来る者はないから、この下手人はお静でもお町でもありませんよ」

平次は笹野新三郎の方を向いてこう言います。

「皆ホツと溜息ためいきを吐きました。わけてもガラツ八の喜びようというものはありません。」

「それから、こんな袋路地の奥へ湯帰りのお楽を連れ込むのは、知っている者でなきやアならないが、女じゃありません。うしろから突いたから、一応女と
思うのももつともだが、女があいくち匕首を持って向う突きにしたとすると、傷口は上向
く筈だ——第一返り血が大変だから、その辺にウロウロしているとすぐ見つかる」

「これは、お楽を胸に抱いて、うしろへ手を廻してヒ首を背中に押し当てるように、恐ろしい力で突き下げた傷だ。これなら返り血を浴びる事もなし、傷口が下向きになっているのが何よりの証拠だ。それから、お楽の手の爪の中に紬の糸屑が、ほんの少しだが入っている、抱き附いて背中を刺された時搔きむしったんだね、紬を着るのは大概男だ」

「何という明察でしょう。万七は一句もなく首を垂れました。」

「一体下手人は誰だ、平次、話して見るがいい、お前には解っているようだが」

「——」

「笹野新三郎は耐え兼ねてこう言いました。」

「最初から申しませう。九月十三夜に、両国橋で私は身投女を救い上げました。これがお楽で、三人組の大泥棒、香三郎の妹で御座います。そばにいた船

へ引上げて貰おうとすると、その船の船頭が權かゐを振り上げて私を打とうと構えたのです。幸い月見船が二三艘そろういたので、私も命拾いをしましたが、これは唯事ではないと思つたから、そこからお樂を引取つて、少し見ていることにしたのです」

「――」

平次の話は奇つ怪でした。調べてみるとお樂は房州生れの河童かっぱで、水で死ぬような女ではありません。兄の仇かたきを討ちたさ、夫の仕事を手伝う積りで、平次の通るのを知つて狂言身投をやり、あわよくば水の中で打ち殺し、やり損じたら、一と芝居打つて、平次の家へ入り込み、平次を何とかして亡き者にしようと思つたのでした。

「笹屋源助というのはお樂の亭主で御座います、それは後で解りました」
平次はこう続けます。

——お楽は平次の家へ入り込みましたが、平次に心惹かれて殺す心が鈍り、
 その代りお静を殺そうと計画したのでした。平次はお静危うしと見て、わざと
 腹を立てた振りをしてお静を母親の許に返し、すぐ様怪しいと睨んだ笹屋源助
 の身許を探し始めました。これがお楽の亭主だったことは言う迄もありません。
 お品を呼出した手紙を、平次が手を廻して笹屋の亭主の書いたものにくらべ
 ると、寸分違わぬ同じ筆でした。笹屋の源助は、女房お楽の心変りを知って平
 次と一と晩一緒に置くのを気遣い、お品をおびき出してその番人にしたのです。
 お町が飛込んで来たのは、これは源助にも予想外だったでしょう。

——笹屋の源助は三人組大泥棒の首領房吉の変名だった事は言う迄もありません。
 お楽が自分を裏切って、自分と三平の在所を教えようとしたのを聞いて、
 始めて殺意を生じ、いよいよ打明けるといふ今晚、銭湯へ行ったお楽を蹤けて、
 この路地に誘い入れ、いろいろに説き立てたのですが、お楽はすっかり気が変つ

て源助の言う事を聞かなかつたので、前から抱き寄せようにして、隠し持ったあいくちヒ首で一と突きにしたのです。

「櫛くしは、源助がチヨイチヨイ私の家へ来るうち、何かの役に立てようと思つて持つて行つたのでしよう。どうかしたら、昨日お静が飛出す時、あわてて落したのを拾つたものかも知りません」

平次はこう説明して、一度つら辛く当つたお静へ、——勘弁しろよ——といった優しい眸ひとみを送りました。お静はもう嬉し泣きに泣いて、それも氣の付かない様子です。

「ところでその笹屋の源助というのはどうした、急いで手配しなければなるまい」

と、笹野新三郎。

「それには及びません、あれで御座います」

指す人込みの中から、一人の男、身を翻ひるがえして逃げ出そうとするのを、早くも平次の手から飛んだ投げ銭、一枚はその項うなじを、一枚は背を打ちます。

「あッ」

ひるむところを、どこをどう飛込んだか、親分の気を知ることの早い八五郎は、サッと飛込んでうしろから組付きました。

「これが笹屋の源助か」

笹野新三郎は、物優しくさえ見える縄付かえりを顧みました。

「それで御座います、三人組の首領かしらで、人殺し房吉という、恐ろしい男で御座います」

平次は驕おごる色ありません。

「そうと知ったら、逃げるんだった。手前てめえの話に釣られて、到頭年貢ねんぐを納めさせられるよ」

房吉は口惜しそうに齒咬はがみをします。

「ガラッ八は最初からお前のそばに付いていたよ、俺の眼の動き一つで、何でも読むのが八五郎の芸だ。逃げた筈の三平も、今頃は捕まっているだろう。それも手配をして置いたよ」

平次は事もなげにこう言います。

「銭形の親分、お前さんはお静さんを捨てちゃならないよ。お静さんを泣かせると、このお町が承知しないから」

酔っ払いのお町はフラフラと立ち上がると、お静の頸かじつ玉に嚙り付いて、泣き出してしまいました。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「オール讀物」昭和八年十二月号 文藝春秋社

底本—「錢形平次捕物全集」第一卷 河出書房 昭和三十一年五月五日初版

編集・発行 銭形俱樂部

平次女難



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>